
夜明けのコーヒー一杯

阪野隆平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明けのコーヒー一杯

【Nコード】

N5158P

【作者名】

阪野隆平

【あらすじ】

幼なじみから突然告白され、思い悩む少女。悩みに悩んだ末、少女は行きつけの喫茶店のマスター「F」に相談しに行くことに――。

「葵。俺、おまえのことが好きだ」

……どうして、こんなことになったのだろう。

紺野葵は頭を抱える。

夏休みが終わり、二学期が始まって、文化祭の準備に追われ、そして文化祭が始まり終わって片づけて――怒濤のような時期が過ぎればめっきり冷えると思ったらそうでもなく、まだまだ残暑が厳しい今年の秋……そもそもそれで秋といえるのかどうか微妙だけれど。そんな時だ。二週間後に中間考査を控えたその日、私は生まれて初めて告白された。幼馴染みの赤城恵一に。

始まりは、なんてことのないいつものくだらない世間話からだった。恵一の様子も普段と変わらず、特におかしいところはなかった……はずだ。自信をもって否定できないのは、もしかしたらあったかもしれないのだ。私が気づかなかっただけで。

どうして彼が告白する会話の流れになったのか、はっきり覚えていない。原因を探そうにも、肝心の会話をちゃんと覚えていないのだから意味がない。

だとしても、『幼馴染みから告白された』という事実は、真っ白の半紙に落とした墨汁の如く、心に残っている。そして告白に対する、私の答えも。

「ゴメン」

たった一言。ハッキリと、意味のある言葉として出せたのは。それだけの言葉を絞り出すのに、私はどれだけの勇気を削ったことか。二人の間に流れる短くも長い沈黙。

私の答えを聞いた恵一は、今まで見せたことのない悲しげな笑顔を向けて言った。

「そっか」

直後、私はその場から逃げ出した。体力がないのに走った。胸が痛くなった。胸が痛くなったのは、走りすぎただけではないだろう。だがどうしてこんな気持ちになるのか、わからない。

家に帰った直後から、私は自室に引きこもった。布団にくるまったら、しなければならぬはずの試験勉強もせず、一心に外界との交流を断った。

当然両親から心配されたが、軽い風邪だと伝えている。両親ともに仕事で家を空けることが多く、また放任主義だったのが幸いした。けれども、いつまでもこうしてはいられないというのもわかってきた。

告白されてから一日経つ。幸いなことに、告白されたのは金曜日だ。明日、つまり日曜日までは上手く誤魔化すことができるだろう。だが明後日の月曜日からは、普段通り過ごさなければならない。いくら放任主義の親でも、娘が学校に行かずに寝込んでいたら病院に連れて行くだろう。明日中には気持ちを整理しなければならない。

しかし……とてもではないが整理できそうではなかった。恵一からの告白が、文字通り矢のように心に突き刺さり、じわじわと頭が、胸が――心が、痛む。

痛くて、なにも考えられない。

痛くて、心の整理ができない。

ただ、痛い……彼の顔を思い浮かべるだけで。昔過ごした頃を思い出すだけで……

どうすれば、私はこの苦しみから抜け出せるのだろう。

私と恵一は物心ついたときから一緒だった。正確には、赤ん坊の

頃からの付き合いだ。

生まれたのが一日違いだったためか、病院で互いの親が知り合い交流が始まったという。

ちなみに、私のほうが一日早かった。どうでもいいことだが、それを理由にお姉さんぶっていたものだ。彼はそれが不服で、よく喧嘩になった。喧嘩の後はお互いともに親に怒られたが。

そして何の因果か、幼稚園、小学校、中学校、高校まで一緒に学校に通っている。

親が話すには出会った当初から（喧嘩するほど）仲がよく、それは小学校まで変わらなかったらしい。だが二人とも物心つくにつれて離れていった。正確には、恵一のほうが私と距離を置くようになったのだ。男が女と一緒に遊ぶことを恥ずかしがるという、思春期特有の感情だとなんとなくだが理解していた。

私は気にしなかったが、彼はやはり気にしたらしい。おかげで中学時代は同じ学校だったにもかかわらず、ほぼ絶縁状態だった。すれ違っても目をあわせようとしない彼の態度に腹が立ったことを覚えていいる。

そんな関係に変化が訪れたのは、高校に入学してからだ。受験のため、ほとんど顔を合わせることもなかった私たちは久しぶりにお互いの顔を合わせたのだ。

話しかけてきたのは恵一だった。一人で家へ帰る途中だった私にいきなり声をかけてきたのだ。この数年間、絶縁状態だったにもかかわらず。

話し方も私の記憶にある生意気なものではなく、大人っぽい、それでいてくれた口調だった。

虚を突かれた形の私はちゃんと受け答えできた自信がないが、数年ぶりの幼馴染みとの会話は楽しかった。なんてことのない近況報告の世間話だったが、それでも楽しかった。

結局、彼は私の家の前まで送ってくれた。彼と別れた後、私の心に残っていたのは感慨深い驚きだった。

諺にもあったと思うが、男というものは少し会わない間にこんなにも変わるものなのか。

私は自分だけに聞き取れる、軽くも重い息を吐いたことを覚えて
いる。

それを皮切りに、会えば近況を報告する程度の中にまでは回復した。小学校の頃と違い、お互いに高校生なのだから冷やかす連中もおらず、ささやかながらも落ち着ける関係が一年ちよつと続いた。

そして昨日、唐突に告白されたのだ。

葵はゆっくりと、重い瞼を開ける。どうやら布団にくるまっ
てるうちに、いつの間にか眠っていたらしい。緩慢な動きで布団から這いずり出た私は、とりあえず洗面所に向かう。

歯を磨き、顔を洗い、着替えよう。外出する気分にはなれないが
何もしないよりはマシだ。

そう考えて一日ぶりに部屋を出た。

ついでだからシャワーも浴びよう。適当な服をタンスから取り出
し、風呂場に向かう。

シャワーを浴びると幾分か気持ちがすっきりした。歯磨きと顔を
洗うという、普段と同じ行動をとったおかげか心も落ち着いたよう
な気がする。

それでも顔は暗く沈んでいた。鏡を見なくてもわかる。今の自分
の顔は、きつとひどい。

どうしようか。こんな顔ではどこにも行けない。どこかに行く予
定もないし、友人も皆、部活動やバイトで忙しい。

両親は出かけたらしく、作り置きしてくれた朝食の上にメモを残
していた。いつものことなので、葵は適当にメモを読み、朝食を腹
におさめる。

朝食を食べ終えた葵は、リビングのソファに寝ころび、天井を

見上げながら思考する。

恵一と会おうか。彼とちゃんと話をしなければならぬ。どうしてかはわからないが、話し合わなければ。

しかし……

携帯電話を取りに行くことも、目先にあるリビングの電話機の受話器を取りに行くことも、葵はしなかった。

簡潔に理由をいえば、もう一步を踏み出す勇気がなかったのだ。

告白に答えた時の勇気が一欠片でもあれば、もう一度会って話すこともできるのに。

言い訳がましいことを頭の中で繰り返しながら、葵は目を閉じようとする。

その時だった。頭の中で、なにか化学反応を起こしたようにあることを思いついたのだ。

そうだ、あそこに行こう。

葵はソファから起きあがると、部屋に戻り出かける準備を始めた。

喫茶店『柊』は、日曜日だというのに客が一人もいなかった。今日に限ったことはないので店主はさして気にしない。経営状況が火の車なのは頭痛の種だったが、騒がしい場所が嫌いな性分の自分にとってはこれくらいがちょうどいい。

客がいなければ店が成り立たないのに、客は少なくてもいいと思う自分の考えの矛盾に気づいてはいたが、それを直す気もなく、店主はコップを磨き続ける。

コップを磨く店主の容貌は日本人のものではない。

肩の辺りまで伸びる赤毛の長髪を頭の真後ろで一束に結び、銀縁眼鏡の下は薄いブルーだった。面長な顔立ちはいかにも外国人特有のもので、身長も百九十に届こうかというほどの長身だ。手足が長いことが余計に背を高く見せているのかもしれない。さらになぜかはわからないが、首に何かをかけているようで、金の細い鎖が顔を覗かせている。

アンティークな店の雰囲気併せて落ち着いた服装をそつなく着こなしている店主だが、容姿だけを見るならこれほどふさわしい仕事もないだろう。

店内にはやや掠れた、しかしどこか心を落ち着かせる音色が静かに流れている。何度も壊れては修理している蓄音機特有の、少しくぐもった音楽が店内の雰囲気づくりに一役買っていた。

だが音楽は少しずつその音量を下げていき、やがて静寂が訪れる。今日開店してから掛けていた演奏が終わったのだ。

次はどれにしようか、と店主が悩み始めたその時、扉の鈴が鳴った。

この客はタイミングがいいのか悪いのか。店主はとりあえず、「いらっしやいませ」と形式的な応対をする。

「こんにちは、エフさん」

入ってきた客は見知った顔だった。

「おや、アオイちゃん。三十七日ぶりの来店だね」

店主は他の客なら決して見せない親しげな笑顔をその客に向けた。紺野葵。

店主にとっては親友の一人娘で、彼女がもっと幼い頃はよくここで預かっていたものだ。親友には悪いが、感覚としてはもう娘のようなものだった。

さすがに高校生ともなれば、年頃なのだろう……なかなか店にも来てくれなくなったが、休日には時々こうして来店してくれる、喫茶店『柊』にとっては大事な常連客の一人だった。

ちなみに、なぜ彼女が店主を『エフ』と呼ぶかというと、店主の

本名の頭文字全てが『F』から始まることに由来する。しかし店主を『エフ』と呼ぶのは葵だけだ。他の人間は本名か『店主』と呼ぶ。葵だけが『エフ』と呼ぶ理由。それは、店主が生粋の外国人であることに原因がある。

初めて葵と出会った時、葵はまだ幼かった。幼い彼女にとって、自分の長い本名は言いにくく、また覚えにくいだろうと考えた彼は、咄嗟に『エフ』と名乗ったのだ。おかげで本名をいまだに覚えてもらえず、『エフ』と呼ばれている。気にしていないし、むしろ『エフ』という呼び名は気に入っている。

葵は店主の目の前のカウンター席に腰を下ろす。

「いつも思うんですけど、どうして前に来た日数を覚えているんですか」

「それだけ暇なんだよ」

言っている本人は冗談ではないのだが葵は冗談と受け取って笑った。笑われても仕方のない言葉の内容だが、と店主も自虐的に笑う。ひとしきり笑った後、店主は店を預かる者として自然のことを尋ねる。

「何を飲む？ いい豆が手に入ってるね。個人的にはお勧めなんだが、客が来ないので豆を挽く機会がないんだ」

「それって高い？」

「安くするよ」

葵が「じゃ、それで」と注文し、店主は豆挽き機を取り出す。

「どうぞ」

「ありがと」

この店ではコーヒーを注文した際、基本的には客が豆を挽く。ただ何となくで取り入れたのだが、一部の常連客には受けがいい。葵もその一人だ。

豆を豆挽き機に流し込み、それを葵に手渡す。葵は早速ハンドルを回し始める。

豆が碎かれ、粉になっていく低く鈍い音が静かな店内に響く。

店主は少しその場を離れると蓄音機の置いてある場所まで行き、レコード盤を取り替えた。新たに選んだレコード盤を蓄音機再び店内には音楽が芽生える。

「エフさんは」

葵は豆挽き機のハンドルを回しながら、なにやら尋ねてくる。

「なんだい？」

「……エフさんには、幼馴染みとか、いますか？」

「ふむ」

店主の目が細くなる。彼自身も自覚する癖の一つで、何かを考える時は無自覚のうちに目を細めてしまうのだ。

「いないことはない。けど、もう何年も会ってないね」

そもそも故郷に帰ったのは何年前だろうか、と心の中で続けた。

「そう、ですか」

葵はハンドルを回し続けるが、傍目から見ても元気があるとは到底見えない。

店主はダメ元で聞く。

「なにか、あったのかい」

長い沈黙の後、葵は小さな声で「はい」と答える。いつの間にかハンドルを回す手も止まっていた。

葵はポツポツと、まるで蛇口から落ちていく水滴のような口調でその悩みを店主に打ち明けた。

「なるほど、ね」

幼馴染みからの告白、か。店主は長い腕を組み目をさらに細める。

「わからないんです……いきなり、なんでそんなことを言ってきたのか」

今にも涙を流しそうな声だ。いや、実際心では泣いているのだろう。

どうすればいいのか、わからない幼子のように。無知なこと自体が罪であるかのようなその姿に、店主も心が痛む。

しかし、悩みを打ち明けられた身としては、ただ優しく接するだけではダメだということもわかっていた。時には残酷な問いかけもしなければいけない。それが頼られた者としての義務だ。

「一つ、尋ねたいのだが」

葵が顔を上げ、店主の顔を見据える。

「アオイ。君は、彼のことが嫌いなのかね」
「え？」

今にも泣きそうだった葵の顔から力が抜け、呆けたような表情になる。突然な問いかけの内容に驚き、頭が真っ白になったのだ。

「い、いきなりなんですかつ、その質問はっ」どもりながら葵は聞き返す。恥ずかしい、というよりは意味がわからないという気持ちからくる慌て方だった。

（……やはりな）

店主は自分の考えが間違っていなかったことを確信する。

「私の質問にだけ答えてくれればいい。もう一度、尋ねよう。彼のこと、嫌いなのかい」

「……………」

葵は顔を俯けて考え込む。

……私はずっと考え、悩んでいる。けれど、何を悩んでいるのか、ずっとわからなかった。

やっぱりエフさんに相談してよかったと思う。何に悩んでいるのか、相談したらすぐにわかった。

だけど……

葵は俯けていた顔を上げる。

「……エフさん」

「うん」

彼は答えを急かさず、曖昧な返事を返す。

「ゴメン。その質問に答えることは、できないよ……」

少しの間の後、

「そうか」

店主は葵を安心させるような微笑を浮かべて、ゆっくりと頷いた。「その問いの明確な答えはないだろうと僕は思う。答えがあるとするなら、それはきつと、“他人に他言しないこと”が正解といえるんじゃないだろうか」

店主は微笑を浮かべた口を動かす。言葉には出さなかったが、それは彼の母国語で「正解だよ」と言っているのだと葵は何となくだわかった。

店内に流れるレコードの鈍くも心地いい音色が、妙に心に響いた。それは告白を受けてから嵐が吹き荒れる海のような気持ちだった心が、海底から鎮まったような気持ちだった。

「さて。あまり放っておいたから、豆たちが寂しがっているよ」

店主の言葉に、ハッと気がついた葵は目の前に置かれた「豆挽き機」のハンドルを手に取り回し始めた。

葵は恵一のことを嫌いなのではない。やっぱり好きなのだ。しかし好きの“質”が彼とは違う。

恵一の“好き”は恋愛からくるもので、葵のは家族愛や兄弟愛などの、つまり身内間からくるものなのだ。

ほとんど生まれた時からの付き合いであるはずなのに、どこでの差がついたのか……想像はできるが答えを知ったところで意味はない。

はつきりと言えることは、やはり自分は恵一の告白に答えることができないということだ。

葵の心の中では、幼馴染みの恵一は“幼馴染み”でしかなく、それ以上でもそれ以下でもないのだ。

豆挽き機から出る音の質が変化した。ゴリゴリと固体を細かくする音が、ザラザラという滑らかなものになったのだ。

店主は耳だけで豆の状態を判断する。もう少しだなどと考え、後ろの飾り棚からコーヒ用のコップを取り出そうかと、棚のガラス戸

を開ける。

「……エフさん。もう一つだけ、質問していい？」

カップはどれにしようかと悩んでいた店主は、「ん？」と少し葵の方にへと振り返る。

「誰も傷つかない告白の断り方って、あるかな」

「ないよ」

店主は即答した。再び棚の方に目を向け、これにしようと洒落た花の模様をあしらったカップを取り出す。

そして本来の仕事をすすめつつも、質問の問いにはしっかりと答える。

「告白はね、された方が受けない限り嫌でも傷つく。断る方も、当然断られる方も。けどそれは仕方ないことだ。なぜならどちらも真剣だからだ。傷つく度合いが大きければ大きいほど、それは真剣に悩んだことの証なんだよ。だから」

カウンター席の方に振り向いた店主は、それ以上の言葉は続かなかった。

ハンドルを回す手が止まっていた。

葵は、泣いていた。両目からは涙の滴が止めどなく溢れていたのだ。次から次へと、枯れることもなさそうに。

店主は慰みの言葉もかけず、ただ無言で飾り棚の方にへと向き直り、カップを元の場所に戻す。

葵は他人のために泣くことのできる娘だ。だからこそ、惹かれる者もいるのだろう。今回は……そう。彼女にとって大事過ぎたがゆえに起こった“悲恋劇”だ。

店主は細めていた目を閉じる。

せめて次は、いや次でなくとも……

自分の胸に位置する、首にかけた金の鎖の先にある結婚指輪を服の上から握る。

……最後には、幸せになれますように。

店主は心の底から祈った。

葵が泣き終わると、目の前には一杯の湯気たつコーヒーが置かれていた。

「今日はサービスするよ」

店主はそう言って奥に引っ込んだ。

『ゆっくり、味わって飲みなさい』

まるでそう言っているかのような行動だ。

ありがたい。彼のこういうところが、葵は好きだった。もちろん恋愛感情ではなく、もっと次元の違う意味合いで。

泣き腫らした顔で静かに笑う。そして、葵は何となく天井の窓を見上げた。

窓の向こうは快晴だ。明日はどうだろう。明日も晴れだといいな。だから空に尋ねてみる。店主のように何でも答えてくれる訳じゃないけれど。それでも。

「ねえ。明日の天気は何？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5158p/>

夜明けのコーヒー一杯

2010年12月15日18時25分発行